

幼兒教育と繪畫

■大會に於ける研究發表の大意■

度島三原女師 米山 えん

一 はしがき

幼兒の、エネルギーは、些々たる刺激に會つても發露して停する處は知らぬ。而して、このエネルギーを身體的方面に使用することは、幼兒教育に於て、最も重要な事である。茫々として極る處なき蒼穹の下で、活々とした自然物により、自由な天地に歌ひ舞ひ、跳ね、踊る、是實に幼兒天眞の發露であつて宇宙靈智の、幼兒に附與した特權である。我々は此處に教育の着手點を求め、最れが現正補導によつて、智能啓發、徳性涵養の要諦とせねばならぬ、然し更に一步退てこれを考察するに、彼等の方を、身體的方面のみに活かして置て、これが一種の習慣性となつたならば、如何、と云ふ事に想到する。こゝに於て、精神的方面にもエネルギーの發達を計り、身體、精神兩方面の、併行的發達が計りたいものである。こ

の意味からして、幼兒期に於ける繪畫も亦刺激の一分子として、必要な次第である。然してこの期に於けるお伽噺と同地歩を占むべきものであることを信ずる。かゝる見地よりしてこの案を作製した譯である。

二 繪畫の階段的發達

吾々の繪畫に於ける發達を考へて見ると、次の三項に分つことが出来る

1 錯畫時代

子供は生れながらに筋肉力を持つて居る。然し調整的運動は出來ぬ。凡てに對して制御力がないから始め二三本の線は多少意味のあるものであつても、いつしか繪畫として無意味のものとなつてしまふ。然るに仔細にこれを觀察すると、其の間自我の内容を窺知することが出来る。然して幼兒自身に於ては是れによつて喜悅し満足して居る。

2 想像畫時代

一點一角が意味のあるもので多少外廓とか、形體とかに注意を向けて來た時代である。そして幾分繪畫的のものである。更に、是れを嚴密に云へば、表

意的のものである。意志の發表思想發表である。色彩にしても稍寫實的になつて來て居る。

3 説明畫及藝術畫時代

イ 説明畫 目的其のものを出來る限り明瞭にし、其のものゝ特性を表はすことに苦心し、その圖畫を見たのみで明瞭になる、そして誰にでも分る様に描くことである。

ロ 藝術的畫 美そのものを目的として存在して居るものである。即ち藝術としての表現が主眼である。つまり詩に類するものである。考へさせるものもある。吾々の美の感じを口であらはす方面と筋肉であらはす方面とある。その筋肉によつて表はされたものである。これは最高の美の鑑賞賞翫によつて出來るものである。

三 幼兒の圖畫

1 幼兒の筋肉活動

幼兒には筋肉活動程大切なものはない。この筋肉によつて考へ、筋肉によつて印象を明瞭にして行く。筋肉は凡ての活動の原動力である。然して幼兒のエ

ネルギ―は、主として初めは基本的筋肉の方に注がれ、發達するにつれて附屬的細筋の方に及ぶものである。故に幼兒に作業を課するに當りては、先づ基本筋肉の陶冶に充分力を注ぎ、然る後に附屬的筋肉に及ぶ様にせねばならぬ。然して幼兒の筋肉活動は或程度迄に獨立的自動的に活動するものであるが故に、思ふままに精巧に動がず、勝手氣儘な運動をなす、故に、筋肉が精神の示す處に従はぬ場合が多いけれども、次第に發達するにつれて、自發的筋肉活動が次第に觀念に徒屬する様になり、意志通りの運動作用が行はれるのである。

2 幼兒の美的鑑賞

幼兒は餘りに美といふ方面に對しては注意を拂はぬ、自分の興味性に合致したもので、實用に叶ふものであれば、多少無細工でも複雑でも意とせぬものである。實に野蠻人の美に對するそれと同一であると云つてもよからふ。

然し六七歳兒になると、少々美的鑑賞又は萌芽を表はすものである。靜かに繪畫に對して眺め入るとか、其の他の藝術品に對しても、多少感情を引くらしいけれども、この美に對する感想とは趣を異にし

て居る點があると思ふ。

3 描出力

幼兒は四歳位な時は、物體の形本觀念をはつきりと知覺することは出来ぬ。出来たにしてもこれを描出する爲の適應運動を筋肉がしてくれぬ。只一般的の線を描出する位なことで、複雑なる或る形體を形成する要素たる特殊の線を作ることが出来ぬ。

然しながら五歳位になると、適當に心像を再現する様な動的作用を始めて来る。然して眼と手とが共同的活動を始めて來た事が分る。それは、線の形體に注意を向け、自分で描いて見ようと努力する様である。但しこれは一般的のものに對してである。これが六歳位になつて來ると稍々進歩して來て、形體の主なる特質に注意し、空間的關係線の彎曲の度合比較的高さ大さ等大略ながら注意を向ける様である。そしてこれに適應する様な調整的筋肉活動を起し努力して描出する。

四 幼兒圖畫の目的

1 美の享樂

美と云ふ事は、暫時なりとも人をして、他の凡て

のものから連絡を忘れしむる力のある場合を云ふのである、美の享樂とは、美そのものを總てのものから引はなして、原因結果の關係等とは全く離れて、他の何物も心の中に現はれ來らぬ様にし、單にそのものだけを心に映じて見ねばならぬ。そうすれば、その外に他のものの這入つて来る餘地はない。この目的が達せられたら、明に其の結果は、即ちそのものに取つては、それは總ての物を離れたる、絶縁の狀態であるし、夫れを見る人からいふと、その物の中に全く安住する境涯である。そして、これがやがてその物に對する充分なる満足を感じずる事である。

人類の美を好むと云ふ事は本能である。藝術的鑑賞力もこの本能によつてある、縱令須臾なりとも凡ての繁雜の羈絆を脱する様に、幼兒の時代から修練發達を遂げさせる事は必須な事である。

若し幼兒の時から物の眞の意味を味ふ事を知らずたゞそれを原因に對する結果としてのみ見る様な者は、長じて後、實際上の事柄以外に深き興味を引くものがなく、唯一の完全なる満足と與ふる慰安を缺くのである。

自然を見、繪畫を味ふ時、吾々は、幼兒と共に解

脱絶縁の境に立つの感があるのである。

2 想像力の表現

幼児の想像は、現實を超越した所謂空想の場面の廣がりである。中には之に現實を加へて、空想と實現との混同想像を以て満足して居る。學者が幼児と詩人との性情につき同一視し、又天才と幼児との事につき同一興型の存する事を視て居るのは、つまり成人の考へつかぬ奇抜な空想を描き得るからである。實に藝術は、一種の想像作用の表現であると云つてよい。それで、幼児の圖畫は特に想像力の表現する處があらしめたい。

幼児をして想像の世界へ、空想の天國へ旅行させるかの如く、同一地歩に置かしめたいと思ふのもこの想像界空想世界の人たらしめ筋肉の活動する限り思想の續く限り想像の極地に幼児を逐ひやりたいてしてそこに眞美の世界を建設させたいのである。

3 興味性

興味性は人生生活上必須なものである。興味の熱烈さ加減で能、不能の分岐點となる。元來幼兒は凡てのものに對して熾烈な興味性をもつて居る。然してこの興味の迸出する處、活動の停止する事を知ら

ぬのである。彼等は疲勞することも知らぬ、即ち興味によつて活動することは幼兒のエネルギーを浪費する事が極めて僅少なるが故である。

4 筋肉練習

個人の發達の自然的順序は、先づ活動的方面から始めて、次第に精神的方面に及ぼすものである。この活動的方面、即ち筋肉活動及經驗は、明瞭正確なる觀念を得る爲めに必要なもので、幼兒の想像思想も實にこの筋肉感から分離することが出来ぬ。然して幼兒は生れながらにして筋肉力は持て居るのであるが、この筋肉力を制御し調整する運動が出来ぬのである。然してこの制御力調整力の運動は、始め大筋に始まつて次第に精細なる筋肉に及んで行くのであるから、始め粗笨迅速から精美緻密なものに至るのである。然してこの精密複雑な調整運動を支配する中樞は高等なものであり、又極めて弱いものであるが故に、幼兒に餘りの細密なる筋肉練習をなさしむると云ふ事は、大に考慮すべきであるが然し筋肉感といふものは老年まで發達するもので年少の時は發達迅速で、老年になるに従つて緩慢遲鈍になるものであるから、先づ幼兒の發達に従つて顧慮すべき

である。

故に左の如き筋肉練習によつて、圖畫的活動をなさしむる様考察した。

イ 斜線練習を主としたる保育材料

ロ 横線練習を主としたる保育材料

ハ 垂直線練習を主としたる保育材料

ニ 圓練習を主としたる保育材料

尤もこの練習は筋肉の運動に外ならぬので出来る限り大きな運動をなさしむる事に努めしめ手先のみでなく、腕全部の運動たることに注意すべきである

五 保育材料

以上述べ來つた處の見地よりして、保育材料を選擇したのである。

1 描出法の種類

イ 隨意畫

(一) 幼兒の自由發表による描出法であつて幼稚園に於ける圖畫的活動中の眞髓である。

(二) お伽噺及其の他の説語によりて描出せしむるものである。

ロ 塗繪(シルウエルト)

(一) 臨廓を與へて斜線、横線、垂直線、圓の塗方練習をなさしむるのである。

(二) 繪型により、自身臨廓を取り隨意に描出する方法

(三) 謄寫繪雜誌及其他の繪本より隨意選擇により出さしめ、日本紙及ドーサ紙等により手本の上にあて謄寫せしむ。

ハ 寫生畫

實物觀察により幼兒の感じの發表をなさしむ。

ニ 繪畫の觀察

藝術的繪畫 說明的繪畫の觀察

2 色の種類

色については幼兒が直觀する自然の色について知らしむべきであつて彼等の經驗及興味に基いて名稱も授くべきである。幼兒は先づ刺戟の強い色を好む故に始め三原色を使用せしむる赤い花、黄色花、青い海等この三原色より發出する色にて、更に所々三色が造られるのであるから次には紫、綠、藍、赭、等の次に幼兒の要求に應じて知らしむべきである。新

に色を造らしむるといふ上に於ては水彩繪具が實に理想的である。

3 畫紙と繪具

甲 用紙

(一)畫紙 出來得る限り大きいものたること、十分に筋肉運動をなさしむる爲には其の場面を廣くして置くこと。

西洋紙、ケントン紙、色木炭紙、ドーサ紙等餘り價の高きものは考へものである『只彩色を施したる爲めに、用紙により不快な色となることあり、これに注意せねばならぬ。』

畫帳として綴りたるは、整理上よろし、然し畫紙としては運動を制限される恐がある。

(二)板及石盤。黑板及石盤共便利である。

乙 繪畫

(一)毛モチヨーク、六色チヨーク(君が代、フラハペンシル等)

これは價も安く着色もよいが、脆い事があるのが缺點である。

君が代の方には、往々着色不鮮明なものがある。フラハペンシルは、かき上げた時、パステル

畫の感じがあつて、美的であるがもうい事一等である。

其他クレオン色鉛筆等あるから研究して後使用すべきである。

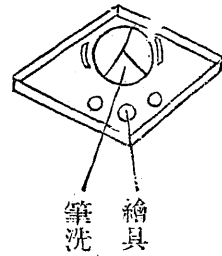
(二)色白墨

大きな運動を大紙へなさしむる時、最もよろし但粉末の飛散に注意すべきである。(板畫の際等最も注意を要す、使用の前極く僅少の混度を與へると、飛散をふせぎ着色をよくする。これに書いた繪に、ニスの稀薄液を噴霧器で散布すると大變よろし。

(三)水彩繪具

繪具は色の練習に最も好都合である、しかも着物にも便利で、美の感興を充分に與へる。最も理想的のものであるが、幼兒のものとしては取扱に不便であるのが遺憾とする點である。適當な設備さえすれば使用が出來ぬといふ事はない繪具箱を造らしめて、これを出せば水もこぼれず、繪具散亂せずに描出の出來る様考へてやることが必要である。

先づ次の様なものも可なり役に立つと思ふ。



(四) 石筆

單調でしかも硬筆であるから、圖畫としての價值は餘り多くない。どちらかといへば、實用向といふ方である。之によつては色彩の觀念は與へる事が出来ぬ。つまり只臨廓線に過ぎぬ。

(五) 黒鉛筆

黒鉛筆は、四號を使用させること。幼兒に一本は與へて置きたいものである。木炭なら申分はない。

附ゴム消は決して幼兒に使用させぬこと。折角の大膽な製作もゴム消を使用する癖をつけるとひねくれたものにしてしまふ。

六 保姆と藝術

保姆は凡てに對して圓滿な感情の持ち主でなくて

はいけない。又、快濶で興味性に富んで潑刺たる生氣あるものでなくてはならぬ。特に、藝術的素質を有して居ると云ふ事は、凡てを美化させ活動させる源泉であると思ふ。もし保姆にして、趣味性なく、美に對しても殺風景何等の感興を起さず、冷淡に見のがす様な人では、とても一種の藝術的作品にも等しい幼兒の教育をすることは出来ぬ。殊に幼兒の美的心情を養ふ事が出来ぬ。幼兒の美に對する心と、保姆の美に對する心とは、非常に異つて居るかも知れぬ。幼兒は道草の小さい花に共鳴して、限らない美の享樂をして居るかもしれぬ、然るに保姆は、かゝる状態に對して何等共鳴するところもなく、此の尊き幼兒の萌芽をふみにじる様な事があつたなら、幼兒の美に對する感應はどんなであらう。これと同じく、幼兒の描いた作品に對して、充分に美なる點を養つてやる溫情がなかつたなら、實に幼兒は可愛相なものである。然し、やたらに保姆自身の美的感情が幼兒の夫れと懸隔せるものを、殊更に押縮めて、幼兒的になれと云ふのではない。若しかゝる事になつたなら、それこそ幼稚園の保姆は段々原始的になつてしまふと云つてもよからう。こゝに云ふのは、

保姆は保姆として自身の趣味に生きなくてはならぬ
そして大いに美感も味ひ、繪も描く人とならなくてはならぬ。只幼兒の出品に出會した時、輕々の内に見逃さず、同情を以て輔導啓發する保姆とならなくてはならぬ、つまり藝術に對して、同情し了解し、それを鑑賞し得る、人たならねばならぬと云ふのである。

○編輯室より

○我が保育界にとつて、誠に多忙多事であつた今年も終らうとしてゐます。幼兒教育と改題してから、本誌も滿一年を過ぎました。今後、益々この時代の潮流に乗りだして行かねばならない本誌の責任もなか／＼大きい事と思ひます、切に皆様方の御援助を願ひます。今や世界を壓倒しつつある種々の思想はやがて、靜かな若共の樂園にも波打つて來るのではありますまいか、

○倉橋先生もいよ／＼、年内に外遊なさる事になりました。今迄恰ど先生の手一つにはぐくまれて來た様な我が幼兒教育界は、先生の御留守と云ふ事に、何となく乳離れの子供の不安さがあります。し

かし先生は、この有史以來、否、空前絶後とも云ふべきこの時代に廣く世界を遊歴なされると云ふ事は誠に喜ばしい事で、一人、先生のみならず、我々、日頃先生の薫陶に預りし人々の、誠に置きへきれない誇りであります、先生は、どんな、大きな抱負をもつて世界をお廻りになる事でせう。教育問題、社會問題、國際問題あらゆる世界の思潮は、今やあの勢力を無限な先生を迎えやうとして待ち構へて居ります。

二三年の後、先生は、それこそ、一層元氣旺盛で澤山の御土産を持つて、また私達の中に歸つて下さいます。その時に我が國が、我が教育界が、先生に負ふ所はどんなに大きいでせう。

幸に日頃御強壯な先生の愈々の御健勝を祈り上げます。

○「今年の夏に」の續稿は何分、倉橋先生の御留學が俄かに、日がせまつたために、非常に御忙しく、引續き御執筆を煩う事が出来ませんでした。あの稿に關係深き土地の方々並に讀者諸君の御諒察を願つて置きます。尙「保育の手段としてのお話」の稿は、何れ近々に、日本幼稚園協會のお話研究部から、多年研鑽した幼兒向きのお話集が出版されますが、その本に一層、詳しくお書き下さる筈ですから本誌に續稿掲載を見合せる事と致しました。これまた御了承を願います。

○本誌の編輯兼發行人が、月から變りました。従つて本誌編輯に關する御寄稿は、今後「東京市日本橋區岩附町一番地小高艶子」方へ御送り下さる様に願ひます。